



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

## — あいなん音故地新 — 「何度でも敗者復活戦」

芸能だけにとらわれず、「若さ」ということに注目しがちな今の時代。若くして何かを成し遂げた、若くして成功をつかんだ…若くして結果を残すとそれだけで天才って言われる。

ただ、人にはそれぞれ花を咲かせる時期があって、早い人もいれば遅い人もおる。短距離が得意な人もおれば長距離が強い人もおる。40歳を越えたわたしは長距離ランナーと言えるやろう。いや、まだ折り返し地点にもたどり着けてないかな、笑。

わたしの周りでは30歳を機にアーティスト活動を辞めて就職したり、家族を持つ人が増えた。彼らがみんな夢に未練がないのかといえばそうじゃないやろう。鍼灸学校には60代、70代の生徒がおって、まさにそこから新たな一步を踏み出そうとしとった。素晴らしい世界やと思った。

年齢に関係なく、人の能力を評価する社会になればいいなあと思う。そのためにも、夢ある限り諦めず、細くてもいいから、休んでもいいから、長く続けることやと思っとる。何度でも敗者復活戦して、いつか自分の目指すところにたどり着ければいい。若いとか早いとか、気にせず。

(テノヒラkiku)



本日！海日和！！ vol.116

## 「カマスのトンネル」

海藻がなくなってしまう磯焼けが問題になって久しい。愛南町もその例に漏れないが、少しずつ回復している場所もあるようだ。

瀬ノ浜もその一つである。潜ってみると、何本ものホンダワラやアカモクが海底から立ち上がり、海面にまで伸びている。その様子は、海の中に突如として現れた森のようだ。

その間を縫うように何千匹ものカマスの幼魚が群れていた。その中をゆっくり泳いでいくと、目の前でカマスの群れが左右に分かれ、後方に流れていく。スズキやヒラメなどの肉食魚も集まっている。藻場はサンゴと同じように海のオアシスだ。これが夏場になると根元から切れ、流れ藻となり、一本もなくなってしまうから不思議である。



【藻場のカマスの群れ】

ふと海面を見上げると、上空がトンネルのようになっている。私の吐き出した泡の周りを、円を描くようにカマスが泳いでいる。そこへ太陽の光が差し込んで、なんとも言えない神秘的な風景だった。

(撮影地：瀬ノ浜)

愛南サンゴを守る会 西尾知照 ともてる